

学会ハイライト

第13回日独皮膚科学会に参加して

(2018年6月13～15日 Rottach-Egern, Germany)

山本 俊幸

福島県立医科大学皮膚科学 教授

はじめに

2018年の6月13～15日にかけて、ミュンヘンの高級リゾート地ロットアッハ・エーガーン (Rottach-Egern) にあるテゲルン湖 (Tegernsee) で第13回日独皮膚科学会 (German-Japanese Society of Dermatology : GJSD) が開催されました。会長はミュンヘン大学皮膚科のThomas Ruzicka教授で、会場となったのは、湖畔の5つ星ホテルAlthoff Seehotel Überfahrtでした。昨今、さまざまな規制があるようで、ドイツでは5つ星のホテルで開催するのは何か特別な事情がないと認められないようです。また、これまでは、たとえば日本で開催されるときはドイツ側参加者の宿泊費は免除 (招待) とされてきましたが、今回はそのような慣例はとられませんでした (しかしお金がないというわりに会場のホテルがゴージャスで、さらに日本の製薬会社が本会の運営に協賛してくれていたのはちょっとビックリしました)。

日独皮膚科学会について

日独皮膚科学会は、西山茂夫先生、故西尾一方先生、故植木宏明先生らのご尽力により設立され、今日まで日本とドイツの皮膚科学的な、さらには文化的な交流を重ねてきました (表)。以前は3年に一度の開催でしたが、ここ最近では2年に一度、お互いの国で開催され、参加者は両国合わせて100

名を超えるほどになってきました。私が本会に初めて参加したのはちょうどドイツのケルン大学に留学中にマールブルグで開催された第5回るときで、その次の会は西岡 清先生が会頭でしたので事務局長を仰せつかりました (しかしドイツ語はまったくできません)。西岡先生のご出身地の奈良で開催されることになったため、何度も足を運び、会場や宴会場の下見や打ち合わせなど結構たいへんでした。あのころは、学会開催にあたって製薬会社の多大な支援をいただけた時代で、ドイツに本社がある会社はかなりの額を捻出してくれました。本当にお金のことを考えずに好き放題できた時代で、贅の限りをとっては大袈裟ですが、いまのご時世では到底できないような学会ができました。私は日本で開催された、第2回 (箱根)、第4回 (倉敷) には参加していないのですが、第5回以降はすべて参加しています。日本で開催された第8回では横浜での豪華クルージング、第10回は徳島の大塚美術館、第12回の東京湾屋形船やスカイツリーなどはいまも記憶に残っています。

本会の公用語は英語ですが、昔はドイツ語が達者な先生が何人かいらっしゃり、流暢なドイツ語で発表された暁には拍手喝采でした。また、女性の先生で着物を着られる方も何人かおられ、わざわざドイツへ持って行って自分で着付けができる本格的な先生もおられ、ドイツの先生方に喜ばれました。ある先生は着物で発表した後、なんと

表 日独皮膚科学会の歴史

	開催日程	会頭	開催地
第1回	1987 June 3-4	Otto P. Hornstein	Erlangen
第2回	1990 October 24-25	西山 茂夫	箱根
第3回	1993 May 14-16	Erwin J. Schöpf	Freiburg
第4回	1996 October 27-29	植木 宏明	倉敷
第5回	1999 June 3-5	Rudolf Happle	Marburg
第6回	2002 November 1-3	西岡 清	奈良
第7回	2005 June 3-5	Michael Meurer	Dresden
第8回	2007 November 15-17	勝岡 憲生	横浜
第9回	2010 June 9-12	Peter Elsner	Weimar
第10回	2012 November 14-17	荒瀬 誠治	徳島
第11回	2014 June 11-13	Alexander Enk	Heidelberg
第12回	2016 October 12-14	横関 博雄	軽井沢
第13回	2018 June 13-15	Thomas Ruzicka	München
第14回	2020 June 10-13 (予定)	山本 俊幸	松島

Braun-Falco教授(神様の存在)がわざわざ寄ってこれ、「あなたの発表は素晴らしい」といわれたと自慢していましたが、その気持ちがよくわかります。若い医師にとっては初めて英語で発表する絶好の機会だと思いますが、今回の学会でoralを希望しながらポスターに回された演題があったのは残念でした。

学会レポート

初日は、両国の大御所の先生からご講演がありました。ドイツからはGerd Plewig先生(ミュンヘン大学名誉教授)が“Dermatology in Munich”, 日本からは西岡 清先生が“Skin diseases described by Japanese dermatologists”というタイトルでお話しされオープニングを飾りました。なお、西岡先生が本会のこれまでの歴史をドイツ語の雑誌Hautarztにも掲載されています(Hautarzt 68: 250, 2017) (図1)。

さて、私は1997年から1999年までケルン大学のThomas Krieg教授のラボに留学させていただいていたのですが、ケルンを離れてからいまだ一度も訪問する機会はありませんでした。今回、ちょうどよい機会なので、まずケルンを久しぶりに訪れてから翌日国内便でミュンヘンへ移動しようと予定を立てました。ちょうど初日のオープニング

セレモニーに間に合うように予定を組んだのですが、あいにくミュンヘン地方の悪天候のため私の移動の飛行機が欠航となり、振替の便が7時間先のものしかないといわれ空港でずっと過ごし、結局ホテルに到着したのは夜11時ころでした。

この学会の魅力は、なんといっても、ドイツの大御所の先生方から直々にコメントをいただけることです。最近は演題数が増えたためか一題あたりの時間配分も短くなり、discussionに十分な時間が割けなくなってきたのは残念です。そのぶん、ポスターの前での熱心な討論も目に

しました(図2)。

今回日本からの参加者は70名強(図3)と、前々



図1 ドイツ語雑誌Hautarztに掲載された日独皮膚科学会の歴史



図2 集合写真



図3
ポスター前での
討論

回のハイデルベルクでの会の90名強に引き続いて大勢の参加者がそれぞれoral, posterでの発表をこなしていました。早朝には、ホテルの玄関前にTシャツ、短パン姿の異様な日本人集団をみかけましたが、梶島先生を中心としたジョギンググループでした。さて、Travel awardを受賞したのは、福島聡(熊本大学)、岳崎彩香(大阪市立大学)、中川優生(島根大学)、宗次太吉(東京医科歯科大学)、

林 周次郎(獨協医科大学)、本田哲也(京都大学)、糟谷 啓(浜松医科大学)、立花宏太(岡山大学)、大湖健太郎(高知大学)、石川真郷(福島県立医科大学)の10名でした(敬称略、順不同)。

この学会は比較的クローズドの会ですが、ドイツ留学の有無にかかわらずどなたでも入会可能です。最近ドイツに留学する若い皮膚科医はあまり多くないようですが、このような貴重な学会を今後も継続していけるよう願っています。なお、本学会は日本皮膚科学会の認定単位がもらえるようになりました。ポストコンGRESSは、マールブルグでした。バスでの移動でしたが、日本からも大勢の参加者がいたそうです。

次回の日独皮膚科学会

今回は日本で開催される番で、福島県立医科大学が担当しますが、2020年6月に松島で開催予定です。ちょうど東京オリンピックの年で、大勢の外国人観光客が日本を訪れるでしょうから、どれくらいの混雑になるか予想もつかず不安な面もあります。精一杯やらせていただきますので、皆さまのご参加を心からお待ち申し上げます。